



Title	出土『日書』と先秦数術家の世界観〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	何, 松延
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16481号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94858
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Songyan_He_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 何 松 延

学位論文題名

出土『日書』と先秦数術家の世界観

・本論文の観点と方法

中国各地から出土する『日書』は、先秦時代の社会に生きる人々にとって、択日（日取りの吉凶を判断する）のための実用的なマニュアル書であった。しかし、その内容と占法は、流通地域の社会風習・祭祀慣習や所有者の階層などによって異なっている。さらに、『日書』は時日の吉凶を示す占法占術の集合（寄せ集め、雑書）のような体裁をとることが多く、統一的な学派や占法原理を持たない。そのため、占術それぞれに独自の問題点と変遷過程が存在する。また、日常生活で使用される実用的占ト書として、『日書』テキストは時代によって編纂・修正されてきた。総じて言えば、『日書』はそれぞれに地域性・時代性・学派性・階層性といった各種の性格（個人性、個別性）を異にしている。四つの性格を明らかにする過程でそれぞれに対応する具体的な方法論も論じなければならない。一般的に出土文献の基本的研究方法としては、王國維が提起した「二重証拠法」すなわち伝世文献と出土文献とを対照する方法があり、後に、人類学・民俗学資料を加えて比較総合する「三重証拠法」、近年では、考古実物（文物・絵画）等を加えた「四重証拠法」が提唱されている。特に『日書』については、内容の多くが散逸しており、参照できる伝世文献が限られるため、民俗学的研究成果と考古実物の使用が不可欠である。（また、研究の視点を史料の考証・解明から、テキスト内容の検討を通じて先秦社会の実態を探る方向へ転換する必要がある。）歴史資料の研究においては、顧頡剛が提唱した「層壘説」では、時代に従って後世の人が史料に新たな内容を付加して強調する傾向があるとする。しかし、『日書』の変遷の場合は「付加」ではなく、実用に応じた「入れ替え」が特徴である。この「入れ替え」式の変遷が出土文献の研究にもたらした新たな課題として、非經典的・実用的資料はこの変遷過程を経て更新されて行くという見方が出てきたのである。

・本論文の内容

第一章では、『日書』研究の課題と基本的方法論を論じる。第一節では、地域・時代・学派・階層の四つの方面から『日書』の主要な占法の成立を検討した上で、各地域と流通経路をモデル化することによって『日書』テキストの流通と変遷の過程を説明する。本論文は『日書』に共通の世界観を探るものとして、共通点の妥当性に関する模索はこれを基盤とする。現段階では、数術・陰陽家・易学の根源について未だに明らかではないが、第二節では三者の関連性と今後の課題について論じる。第三節では、2024 年までに公開された数術類文献について、その基本的形式と掲載書物を列挙した。

第二章では、主に『日書』どうしの対照的研究方法を用いる。つまり、戦国中期末頃の九店楚簡『日書』と、放馬灘・睡虎地二種の秦簡『日書』に記載されている「盜者」篇を対照比較考察することで、『日書』の個人性・個別性を把握するという方法を試みた。その上で、睡虎地秦簡『日書』甲乙種において乙種が比較的早いこと、あるいは乙種が甲種の底本であることを確認した。墓主の喜は、使用上の便利性から、乙種を基に甲種を添削・修正したと考えられる。また、「盜者」篇における十二動物は後世の十二支の動物に連想されるものであり、本章の第四節では当時の楚地の十二動物について論じている。

第三章では、門を主題として、第一節では運命・気運に関わる風水的門を、第二節では旬に循環する超自然的・両面的な孤虚の気が出入りする「門」を、第三節では一年の陰陽変化を表す刑徳の「門」を考察する。なお、その孤虚の門における煞気の考察を通じて、第五章との関連性が明らかになる。すなわち、『日書』では多層的吉凶判断を設けて人間の全ての活動は数理に従って

行うべきことを提唱しており、その数理或いは天数は善悪なしで常に運行して吉凶を生じ、人間は「趨吉避凶」の原則によって活動する。そして戦国後期、巫祝集団の族的解体に伴い、社会に「神授的」な巫が顕著に増加した。しかし、当時の社会では、巫の超自然的力や霊能性は善悪なく、誰にでも害を及ぼす可能性があるとして認識されていた。そのため、当時の『日書』ではそのような人間を特別に言及していたのである（第五章第四節）。

『日書』と易学とはそれぞれ独立して発展してきたものと考えて、第四章では、易学と数術の関連性を考察する。一年の陰陽消息を顕在化できる刑徳は、一年中の気の変化を計量化するものであり、およそ前漢初期（孔家坡漢簡『日書』の景帝期を基準とする）までに成立したと考えられる。それに対して、初期的な卦気説は戦国末期の帛書易傳に見られる。その内容は、乾坤（「二三子問」篇）と損益（「要」篇）によって季節変化を描き、乾坤、損益の徳を提唱するものである。前漢期において、卦気説は魏相の四正卦的思想を経て、孟喜に至って正式に成立した。時代的に、刑徳は易学の卦気説より早く登場したため、易学は数術学から啓発を受けたと考える。ただし、これは直接的伝授関係を意味しない。帛書易傳「要」篇では損益の二卦を吉凶の門とするが、刑徳における門は気が均等な状態になることを示す。故に、易学者が導入したものは、刑徳の陰陽消息を具体的に表現する考え方のみであろう。

第五章では、対抗儀礼を軸として、戦国中期のト筮祭禱簡と戦国末期の『日書』『五十二病方』とを比較し、その呪術・宗教観を考察した。結論として、その時期に、社会構造の変化に伴って儀礼の対象・儀式・実施者が変化し、全体的に世俗化する傾向が見られる。要するに、儀礼は専門的巫祝・貞人が行うことから、一般人でも実施できるようになり、その手段も上帝の權威性を借りたり、道具によって鬼を撃殺したりすることができると説くようになるのである。